

なぎら健吉

フオークシンガー

あの香りのコーヒー

ひとしずく



サイフォンのお湯がロートに上がってきて、竹べらで攪拌^{かくはん}をする。そしてコーヒーがフラスコに完全に落ち終わるのを見ていた。その昔、そんなコーヒーの淹^いれ方をしていた。あれは何年ぐらい前だったか。

ドリップ式のコーヒーに慣れてしまった昨今、そうしたサイフォンで淹れるコーヒーが懐かしい。サイフォンとドリップで淹れる方法とは似て非なるもの

なのかもしれないが、そこまでこだわりのないで、あたしには違いがよくわからない。しかしサイフォンと、ドリップではやはり趣が違う。時間に余裕のない時は、俄然ドリップが重宝なのだが、サイフォンで淹れるコーヒーは時間がかかり面倒くさい分、それが一種の儀式のようを感じるのである。しかしいつの間にかサイフォンでのコーヒーはやめてしまった——どう

してだったか？
あたしが最初にコーヒーを意識したのはいつの頃だっただろうか。確か小学校低学年の頃だったと記憶するが、銀座の某デパートの地下にコーヒーを飲ませてくれるスタンドがあった。その側を通るといつもコーヒーのいい香りが漂ってきていた。子供心になんていい匂いだと思っていたのを覚えている。母親はその匂いに誘われコーヒーを

注文した。あたしはココアを飲んだ。あのコーヒーのいい香りは忘れられないし、今でも喫茶店の前を通る時、焙煎の香りに同じような思いに駆られる。ただその匂いに誘われて喫茶店に入って注文したとしても、あの香りに勝るコーヒーに出会うことはまずない。

コーヒーとは香りだけなのか？ いや、当然そんなことはないだろう。しかし味覚とは舌で感知するのはなんとわずから5%で、匂いが95%ということであるらしい。つまりコーヒーの場合、芳しい香りが重要な要素だと言えようが、実際は産地、コーヒー豆の種類、ブレンドによって香りが微妙に違ってくるのであろう。しかしそこまでは





フラスコ内の水を沸騰させ、その蒸気圧で抽出するサイフォン式コーヒー。コポコポと湯が沸く様はずっと見ていられる 撮影協力：珈琲専門店 蘭

知り得ないし、追求もしない。
なんと言ったらいいのだろうか、
香りと味が一致するコーヒーを
口にしたいのである。

コーヒーを嗜む店、昔はまず
喫茶店と相場が決まっていた。
高校3年生の頃だろうか、喫茶
店に入り浸っていた。一日に2、
3軒ハシゴということもあった。
喫茶店という空間が好きだ
ったんだろうし、友達との会話
が楽しかったんだろう。長居す
る我々に店員がいったい何回水
を注ぎ足しに来たことだろうか。
最近ほとんど喫茶店に足を向
けないようになってしまった。
セルフサービスの、カフェ形式
のチェーンが増えてから、そう
なってしまった——理由は定か
ではない。

しかし昔ながらの構えのいい
喫茶店や、名曲喫茶など見ると
ついふらふらと吸い寄せられて
しまう。

そこで眼にする、律儀なマス
ターが、律儀にサイフォンで淹
れるコーヒーの店なら言うこと
はない。そうした店で、子供の
頃のあのコーヒーの香りをふと
思い出すことがあるのだ。

なざら健吾（なざら けんいち）

1952年、東京銀座（旧・木挽町）に生まれ、葛飾区や江東区で育つ。1970年、岐阜県中津川で開かれた全日本フォークジャンボリーに飛び入り参加したことをきっかけにデビュー。コンサートやライブ活動を続け、テレビやラジオ、映画に出演。また新聞、雑誌で執筆。エッセイ集として『絶滅食堂で逢いましょう—なざら健吾が行く東京の酒場・食堂・喫茶店』『酒場のたわごと』『タバもここにいた!—なざら健吾の東京居酒屋』などを、写真集として『東京のこっちがわ』『町のうしろ姿』『町の残像』などを上梓。